龍谷大学アジア仏教文化研究センター　ワーキングペーパー
No. 13-5（2014 年 3 月 31 日）
調査報告

# 調査報告

## —河内・大和地域における行基関係史跡を訪ねて—

中川修
（龍谷大学文学部教授）

目次

１．調査の概要
２．調査記録
３．調査を終えての所感

【キーワード】：行基　僧尼令　仏教理解　社会的問題関心　河内・大和地域

1. 調査の概要

調査日程：2013 年 8 月 6 日～8 月 8 日（2 泊 3 日）

調査者：　中川修

調査目的：河内・大和地域における行基関係史跡の調査

調査先：　竹林寺その他

調査内容：河内・大和地域に残る行基関係史跡を訪ね，併せて関連する神社・道路などの調査を行った。調査を行った主な場所は次の通りである。

○道明寺

○同天満宮（土師社）

○葛井寺

○辛国神社

○野中寺

○西琳寺

○白鳥神社

○誉田八幡宮・誉田御廟山古墳（伝応神陵）

○河内国分寺跡

○石神社（智識寺跡）

○枚岡神社

○竹林寺

○往生院

○霊山寺

○薬師寺

○喜光寺

○菅原神社

○西大寺

○佐紀神社

○海龍王寺

○宇和奈辺・小奈辺古墳

○秋篠寺

○泉橘寺

２．調査記録

現地での調査記録は以下の通りである。なお宿舎は，初日が市営地下鉄・心斎橋駅近くに，二日目が JR 奈良駅前に宿をとり，宿泊した。

□8 月 6 日（火）

09 時 05 分　市営地下鉄・長堀橋駅に集合，ホテルに荷物を預け，打ち合わせ

10 時 30 分　道明寺・同天満宮（土師社）

11 時 45 分　葛井寺・辛国神社

13 時 25 分　野中寺

14 時 55 分　西琳寺・白鳥神社

15 時 25 分　誉田八幡宮・誉田御廟山古墳（伝応神陵）

15 時 55 分　河内国分寺跡

16 時 20 分　石神社（智識寺跡）

17 時 50 分　宿舎に到着

□8 月 7 日（水）

08 時 00 分　ホテルで打ち合わせ

09 時 35 分　枚岡神社

10 時 12 分　竹林寺

10 時 40 分　往生院

11 時 07 分　霊山寺

12 時 55 分　薬師寺

14 時 55 分　喜光寺

15 時 10 分　菅原神社

15 時 50 分　西大寺

17 時 15 分　宿舎に到着

□8 月 8 日（木）

08 時 30 分　ホテルで打ち合わせ

10 時 10 分　佐紀神社

10 時 30 分　海龍王寺

11 時 00 分　宇和奈辺・小奈辺古墳

11 時 30 分　秋篠寺

18 時 30 分　宿舎に到着

12 時 55 分　薬師寺

13 時 55 分　泉橋寺

15 時 15 分　宿舎に帰り，解散

以上の日程について，それぞれの調査日毎に調査の概略を述べる。調査の目的は，第３ユニット（東アジア地域班）の今年のテーマが「変容する仏教」であり，僧尼令研究会を継続していることもあって，僧尼令違犯とされ，治水土木事業に携わり，後に大僧正位を授けられた僧行基（668－749）が活動した地域を歩き，行基の伝道と社会的問題関心の展開とを再考するためであった。昨年度は行基の生誕地である和泉地域を訪れたが，今年度は行基の思想形成の背景にある同じ渡来系氏族の仏教が展開した河内地域と，彼の伝道が故郷から次に向かったのが難波京から平城京への道沿いであることから奈良地域の関連史跡を訪れることにした。参加者は，いずれも僧尼令研究会のメンバーで，昨年案内人を務めてくれた川崎一輝君（本学大学院生）に加え，数元彬（本学大学院生），吉岡諒（本学大学院生），中本由美（本学大学院研究生，2012 年度 BARC 公募研究員）の諸君，そして山本潤氏（薬師寺職員）である。

8 月 6 日は，市営地下鉄・長堀橋駅に集合し（川崎，数元，中本），荷物を駅近くの宿舎に預け，簡単な打ち合わせを行った。そして事前計画通り旧称土師寺ともよばれた道明寺および同天満宮（土師社）に向かった。近鉄・道明寺駅をおりて商店街を抜けると大きな境内を有する道明寺に着いた（藤井寺市道明寺 1 丁目）。この一帯は土師氏の本貫地で，河内国志紀郡土師郷に位置し，土師寺は氏寺と考えられる。現在は真言宗御室派の尼寺で，明治までは隣接する道明寺天満宮と一体で神仏習合状態であり，その後に移建されたとあった。四天王寺式の伽藍配置で，礎石の一部が境内に残されていた。側を通る東高野街道を挟んで，入口に土師窯跡の石碑が建つ道明寺天満宮がある。土師氏の後裔氏族でもある菅原道真が太宰府に左遷されたときに立ち寄ったこともあって，天神信仰の神社になっている。1952 年までは土師社と呼ばれており，本殿の祭神は天穂日命・菅原道真・覚寿尼（道真の母）であるが，元宮として境内に佇む土師社には，天夷鳥命・大国主神命・野見宿祢命が祭神として祀られてあった。また境内の隅には近

くから出土した修羅のレプリカ（8.8 メートルと 2.8 メートル，5 世紀半ば頃）が置かれていた（大阪府立近つ飛鳥博物館と藤井寺市立図書館で保存，重要文化財に指定）。そして道明寺天満宮を出たところから少し離れたところに，古代の道明寺（土師寺）の五重塔の礎石が移設してあった。次に葛井寺（藤井寺市藤井寺 1 丁目 ）に向かった。葛井寺は藤井寺とも称し，葛井氏の氏寺である。葛井氏は百済系渡来氏族で，王辰爾（船氏の祖）の甥胆津が白井史を名乗り，養老 4 年（720）葛井連に改氏姓したことに始まる。本堂と南大門は重文。また参詣曼荼羅（室町時代）には薬師寺式の伽藍配置で描かれているとあった。現在の葛井寺は庶民の中に溶け込んだ寺院であった。また境内の掲示板には，西国 5 番の札所とあり，そこには神亀 2 年（725）聖武天皇が千手観音を彫らせ，開眼供養には藤原房前，導師には行基菩薩云々の記述があった。南大門の近くに，計画には入れていなかった辛国神社（式内社）があり，立ち寄った。辛国は韓国とも書き，祭神は饒速日命・天児屋根命・素盞嗚尊であるが，渡来系氏族と考えられる。韓国氏には行基と同時代には役行者に仕えた韓国連広足がいる。昼食をとり，藤井寺駅南約 1.5 キロにある野中寺を訪れた（羽曳野市野々上５丁目）。野中寺は葛井氏と同じ王辰爾を祖とする船氏の氏寺で，高野山真言宗（金剛峯寺派）の寺院。船氏には伝道形態の類似性から，行基の師とされる道昭がいる。道昭（629‐700）は白雉 4 年（653）入唐し，玄奘三蔵に師事し，南寺（元興寺）伝法相宗の祖となった。境内に残る礎石は移動しており，発掘により旧伽藍は三重の塔がある川原寺式に近い伽藍配置で，「庚戌」（650）の銘のある平瓦が出土している。また，丙寅年（666 年）の銘が刻まれている金銅弥勒菩薩半跏像を蔵していることも著名。現在は中之太子と呼ばれ，太子信仰の寺院である。

古市駅で雷雨のため休息をとり，次に西琳寺を訪れた（羽曳野市古市 2 丁目）。百済系渡来人である王仁の後裔西文氏（河内文氏）の氏寺で，別称は古市寺，現在は高野山真言宗（金剛峯寺派）の寺院である。発掘により東に塔，西に金堂をもつ法起寺式伽藍配置が推定されており，巨大な五重塔心礎が残っていて，河内屈指の巨大寺院であったことがわかる。さらに境内には中世に西琳寺を中興した叡尊の墓である五輪塔があった。また西琳寺近くの蓑の辻には，難波京と藤原京を結ぶ竹内街道と河内国をほぼ南北に縦貫する東高野街道が交差するため，嘉永元年(1848）に立てられた道標が残されており，近くを流れる石川がすぐ先で大和川に合流する場所でもあり，古代より交通の要所であった。古市駅に戻る途中，近くにある日本武尊の白鳥陵に比定されている古墳に関係する白鳥神社に立ち寄った。

最後に，河内国国分寺跡と行基の生涯の中で大きな転機となった大仏造営に関連する知識寺を訪れた。タクシーで向かったが，途中，応神天皇を祭神とする誉田八幡宮を訪れ，古市古墳群最大の規模の誉田御廟山古墳（伝応神陵）を間近に見た。そして丘陵とはほど遠い殆んど山裾にある河内国国分寺跡（柏原市国分東条町）に行った。大和川を眼下に見下ろす所に位置する国分寺跡にはわずかに七重塔の礎石が残るだけである。対岸には難波と大和（斑鳩）を結ぶ竜田道（奈良街道，立田越え。現在の国道 25 号線）が通り，主要道路沿いに位置していることがよくわかる。いずれにせよ現地に立ち，国分寺建立の詔を想起すると，国府の所在地が隣接する藤井寺市であり，この地点が河内国国分寺とも思えないような離れた地点であった。国分寺址から国道 25 号線に出て国豊橋で大和川を渡り，狭い住宅街を進んでいくと石神社があった。延喜式内社で，「河内国大縣郡石神社」とある。その鳥居の脇に，近くの住宅から発掘された「智識寺東塔刹柱礎石」が展示してある。伽藍は東西に塔をもつ薬師寺式の配置であったらしく，塔心礎の柱穴の直径が 122 センチであることから高さ 48.8 メートルの五重塔であったと推定されていた。側には，この塔の高さを復元した丘が築かれ，そこは展望台公園となっており，塔の高さが実感できるような設えがあって，河内平野が一望できる場所であった。知識寺の規模の大きさに参加者一同改めて驚き，聖武天皇に建立を勧めた光明皇后の『続日本紀』の記事を再考する必要性を痛感し，近鉄・土師ノ里駅から電車で宿舎に帰った。

8 月 7 日は，8 時に宿舎で打ち合わせた後，9 時半に近鉄・瓢箪山駅で吉岡君と山本氏が合流し，タクシーに分乗し，先ず河内国の一宮である枚岡神社（東大阪市出雲井町）に向かった。主祭神は天児屋根命で，中臣氏の祖神であり，朝廷の祭祀と関係が深い。枚岡神社は元春日とも称し，近くを暗（くらがり）峠越えで奈良に通じる国道（酷道？）308 号線が走っている。生駒山地の暗峠は，大和川を挟んで南側の金剛山山地の竹内峠と並んで，河内と大和を結ぶ通路で，暗越奈良街道あるいは大坂道と称される。『行基年譜』（『続々群書類従』第 3 巻，以下『年譜』）によれば，故郷の和泉地方で慶雲元年（704）に家原寺，翌年に大須恵院（高蔵）を立てた後，行基の伝道活動は 710 年平城京に遷都されると，和銅 2 年（716）恩光寺（大和国平郡床室村），養老 2 年（718）隆福院（登美，大和国添下郡登美村），720 年 石凝院（ 河内国河内郡早村），養老 6 年（722） 喜光寺（菅原寺，右京三條三坊）と生駒山地を越えて，河内から大和に展開を見せている。それは難波京と平城京とを結ぶ最短距離のルート上に位置している。 ここの挙

げた石凝院は東大阪市日下町の寺院址に比定されているが（井上薫編『行基事典』231・531 頁，国書刊行会，1997 年），今回は暗越奈良街道を確認することに重点を置き，訪れなかった。また恩光寺は場所が特定されていないが，竹林寺行基墓から鎌倉時代の文暦 2 年(1235)に発見された墓誌銘の記録である『行基舎利瓶記』に「大倭国平群郡生駒山東陵に火葬す。これ遺命に依る也」とあることから，生駒山地の大和側の山裾にある竹林寺と『竹林寺略録』に「生馬山竹林寺之東陵」（『大日本仏教全書』第 119 巻）にあるとされている往生院を訪れた。竹林寺はタクシーを下車して少し坂を上がり，竹林寺古墳の脇を通ると，現在は無住の竹林寺がある。入って右に少し行くと史跡行基墓とある石碑が建ち，その奥に笹でおおわれた小さな墳墓があった。また門に向かって左手を歩いて行くと忍性（1217-1303）の墓もあった。忍性は文殊菩薩として行基を尊敬し，救済活動を行ったことで知られている。そして谷の向かい側に行き，墓地を抜けて坂を上がると往生院があった。行基の火葬の地として伝えられ，小さな本堂北側の宝篋印塔には正元元年(1259)の名があり，往生院の周囲に地域の惣墓が広がっていた。次いで，隆福院（登美院）に比定されている霊山寺（奈良市中町）を訪れた。霊山寺は暗越奈良街道の北側に位置し，街道に並行して流れる富雄川の支流がある谷間に本堂（国宝，鎌倉時代）をはじめとして鎌倉から室町時代の三重塔・鐘楼・鎮守十六所神社などの重文が点在する。本尊は薬師如来座像（重文）で，境内の奥まったところに伝菩提僊那の墓所があった。また近くに追分廃寺があり（奈良市大和田町），隆福院に比定する見解もあるが，今回は訪れることはしなかった。

昼食をとり，薬師寺へ。この日同行して頂いた同寺職員の山本氏から薬師寺の各伽藍並びに鎮守の休ヶ岡八幡宮について，詳細な説明を受けた。「行基舎利瓶記」（墓誌），『続日本紀』行基伝ともに行基が薬師寺の僧であったと伝えている。薬師寺から徒歩で，次に喜光寺に向かった。その途中，唐招提寺を左に折れて行き，薬師寺僧も埋葬されている惣墓に立ち寄り，垂仁天皇陵を左手に見てさらに北上し，国道 308 号線を越えて阪奈道路下のガードを抜けると喜光寺の南大門が見えてくる。その場所は，丁度，暗越奈良街道の終着点。喜光寺（奈良市菅原町）は菅原寺とも称し，現在は薬師寺の末寺である。本堂（重文，本尊阿弥陀如来）を見学し，副住職の小林澤應氏からお話を伺いながら，ご厚意で新築なった写経道場で休息させて頂いた。そして寺の横から出て，隣接する菅原神社を訪れた。菅原神社は土師氏の氏社であり，延喜式内社で，大和国添下郡に小社と記載されている。祭神として天穂日命・野見宿祢を祭る（奈良県編『大和志料』上）。大和の土師氏

は，奈良時代の末になると天応元年（781）に菅原氏に，そして延暦元年（782）に秋篠氏に改氏姓を許されて，二つの地域（菅原・佐紀）に勢力を張っていた。そして行基とは直接関係しないが，下調べで，西大寺の奥の院には叡尊の墓があることを知り，忍性の師でもることから，併せて昨日訪れた西琳寺を中興したことも想起しつつ，足を延ばして見学した。午後は半日，炎天下を歩き通したので疲労し，近鉄大和西大寺駅から宿舎に帰った。

8月9日は，9時から打ち合わせをして，半前に宿舎を出発した。大和西大寺駅から午前中はレンタサイクルで，佐紀地域をまわることにした。その目的は，『年譜』慶雲2年（705）38歳の所に，「引_導生母_安_居右京佐紀堂_，盡レ力供養」とあるので，佐紀堂の位置は不明であるが，当時存在したと想定される佐紀神社・海龍王寺・佐紀古墳群（佐紀盾列古墳群）をまわり，佐紀の土師氏ゆかりの秋篠寺を訪れることにした。

先ず，大和西大寺駅から再建された平城京大極殿の背後に位置する佐紀神社（奈良市佐紀町）に行った。佐紀神社も延喜式内社で，大和国添下郡に小社と記載されている。次に法華寺の前を通り，その北東の隅にある海龍王寺（奈良市法華寺町）に行った。海龍王寺は隅寺・隅院とも呼ばれ，現在は真言律宗寺院。西金堂にある五重小塔や経蔵を見学した。さらに自転車で宇和奈辺・小奈辺古墳等の周囲をめぐり，陵墓参考地を含む佐紀古墳群を見学した。そして再び大極殿背後の道路に戻り，西に走って，秋篠川沿いの路を遡り，称徳天皇高野陵を右手に見て，ようやく秋篠寺（奈良市秋篠町）に到着した。秋篠寺は当初は法相宗であったが，現在は浄土宗西山派である。東塔の礎石と鎌倉時代の本堂などを見学した。

昼食の後，タクシーに分乗し，歌姫街道を通り泉橋寺に行った。歌姫街道は平城京大極殿跡北側の佐紀町からほぼ直線に北上し，添御縣坐神社の左を通り，少し右斜めに北上して木津川市立木津小学校の交差点までの街道である。到着点は木津川に架かる国道24号線の木津大橋に近い。木津大橋は東大寺から般若寺を経由してくる奈良坂越えの終着点である。泉橋寺は『年譜』天平12年（740）に「発菩提院（泉橋院），隆福尼院已上山城国相楽郡大伯（狛）村」とあり，当時は山背の国府も近く，恭仁京（740-744）と平城京とを結ぶ要路に設けられた伝道施設である。現在は，浄土宗寺院で，門前には般若寺真円上人発願の地蔵石仏（泉大仏，徳地3年〔1308〕地蔵堂完成）があり，境内の奥に五輪の塔（重文）があった。木津川（当時は泉川）北岸の堤防直下で，『年譜』には「泉大橋　在_相楽郡泉里_」，「泉寺布施屋　在_相楽郡高麗里_」とある。僧

院・尼院・橋・布施屋という行基の伝道活動に見られる特質が最もよく示されている地点に立ち，木津川の流れを確認して，調査日程を終えた。

３，調査を終えての所感

今回の現地調査は，行基の思想形成の背景にある同じ渡来系氏族の仏教が展開した河内地域と，彼の伝道が故郷から次に向かったのが難波京から平城京への道沿いであることから奈良地域の関連史跡を訪れることにあった。歩いてみて，今後明らかにする必要があると考えたことは，下記の４点である。

一点目は，土師氏（道明寺）の本貫の一つでもある中河内の古市古墳群には渡来系氏族の船氏（野中寺）・葛井氏（葛井寺）・西文氏（西琳寺）が活動し，氏寺をもつ仏教文化が育まれた地域であるが，そこに行基の道場が見られないのはなぜかという点である。あわせてこの地域に智識寺が建立され，巨大な塔と共に盧舎那仏があり，紫香楽での大仏造立の契機となったことを考えると，そこに新羅の審祥や東大寺の良弁・慈訓（船氏）などの華厳宗の展開に重要な役割を果たした僧侶の存在が想定され，行基の伝道活動との関係を改めて検討することが必要となる。

二点目は，故郷での活動の次に，行基の伝道が大きく展開をするのは暗越奈良街道沿いであることのもつ意味である。平城京遷都以後，弾圧を受けて故郷に帰るまでの約15 年間，伝道活動は暗越奈良街道沿いに展開されている（恩光寺・隆福院・石凝院・喜光寺）。行基の伝道活動がもつ方向性が何かを明らかにせねばならない。その際，枚岡神社が藤原氏と深い関係をもつことも考慮する必要もあろう。

三点目は，平城遷都が新興勢力である藤原氏と大化の薄葬令以降沈滞した土師氏による方策との見解が古くからあるが，行基の平城京進出は土師氏による影響があるのか否かの検討が必要であろう。その場合，行基が佐紀の土師ではなく菅原の土師に喜光寺を立てたのはなぜかであり，しかも自身が僧籍を置き，かつ僧綱の置かれた薬師寺に接近した場所を選ぶ理由は何か，併せて考察せねばならないであろう。

四点目は泉橋院と伝道活動の方向性との関係である。『年譜』に「讃云，此院天王屢行幸，影像作テ安置給所也」との後世の書き込みがあるが，この天平 12 年から聖武天皇と行基の関係は密接になったと見る見解もある。行基はなぜこの年に泉大橋を造ったのだろうか。行基は幾条もの僧尼令違犯に問われたが，僧尼令観玄象条違犯にも問われ

ており，仏教理解において国家が興隆する仏教と相違する理解を成立させていた，再検討が必要であろう。

三日間，中河内地方の古市古墳群から大和の佐紀古墳群，それらを結ぶ暗越奈良街道，そして歌姫街道から泉橋寺へと，本年は行基の生誕地での伝道活動を第1期と見れば，第2期の伝道の道を歩いたことになった。できれば次年度も行基関係史跡の調査を試みたいと考えていることを付言して，この報告を終えることにしたい。